

読書感想文

「なぜ私たちは喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？」

フレデリック・ロルドン著

経済学部経済学科2年 勝又一輝

1、非正規社員の増加

2014年11月、非正規雇用の労働者の数が初めて2千万人を超えた。統計資料でさかのぼれる1984年以降初めてである。非正規雇用の労働者の中で、好き好んで非正規雇用を選択している人は、学生を除けばほとんどいないだろう（個人の都合でどうしてもフルタイムで働けない場合はある）。正社員の立場を望んだとしても、雇ってもらえないので、仕方なく非正社員になるしかない。今回読んだ著作では労働者は進んで企業に隷属していることを意志的隷属としているが、非正社員として雇用者と契約を結ぶ場合、意志的隷属のような積極性はみられないのではないか？非正社員の場合はどのような感情を持つのか？これがこの本を読んだ時の感想となった。

正社員の多くがやりがいや自己実現を得ながら、際限のない利益の追求と競争が繰り返される。その結果、最も初めに犠牲となるのは非正規雇用の労働者や下請けの企業であろう。これからの日本社会は非正規雇用の数が増加すると言われ、彼らはロルドンが主張する、隷属的支配構造が生み出す暴力性に晒される。ここでは、非正規労働者に焦点を当て、著作の内容に触れながら、これからの社会での生き方を考えてみたい。

2、非正社員の感情

ロルドンによれば、企業は、労働者が企業に隷属することで生まれる、悲しみの感情よりも喜びの感情を増やすことによって、企業に従順な労働者を作り出し、利潤の最大化を達成しようとしているという。社員は、会社内での序列構造が上位の人による、行動の整列化に伴う感情の操作があり、悲しみの感情よりも喜びの感情を増大させる。企業が持つ欲望のベクトルの方向性と労働者が持つ欲望のベクトルを近似させることを狙いとしている。企業はその企業内での労働が非常に価値のあるものであるように装い、労働者の労働に価値を付加させる。仕事で良い成績を残すことができれば、企業内で上司からは褒められ、注目を浴びることになる。そうすれば、周りからの承認を得ることができ、仕事場は居心地の良い場所となる。また、福利厚生の実施やボーナス、昇進のように楽しい感情を増やすことにつながる要素がいくつかある。二つの感情の量的な変化は絶えず起こっているものの、喜びの感情が悲しみの感情に勝っているという大小関係が、不変的な状態として維持しようという企業側の努力がある。その結果、企業は、自ら望んで労働に従事するような、企業にとって理想的な人材を、作り出すことに成功する。

上で述べたような、喜びの感情を増加させる要因となるものは、正社員のほとんどが得ら

れるものだろう。一方、非正社員にとってはどうか。喜びの感情を増やすことにつながる要素を非正社員はほとんど得ることができず、むしろ、悲しみの感情を増やす要素ばかりが与えられているのではないだろうか。

非正社員の労働は正社員と比較すれば少ない報酬が割り当てられている。同じ内容、同じ量の労働を行うにも関わらず、非正社員よりも正社員のほうが高い賃金を受け取っている。このような現状では、非正社員は労働に不公平感が常に感じてしまうことになるだろう。さらに、賃金の額は、自らの労働が勤める企業の中で、どれだけの評価を得ているかといった承認にもつながっているはずである。非正社員は平等な評価を得られないことにもなる。非正社員がやりがいを感じるという喜びの感情が生まれにくい状況にあるといえる。

正社員だからといって、安定した収入を得られる時代とは言えないものの、非正社員には安定性がない。将来に対する見通しが立たないことで、不安に悩まされる人や、結婚に踏み切ることができない人もいる。社会で一般的に当たり前といわれるような人間の活動が阻害されることになってしまう。

非正社員は正社員が持たないような悲しみの感情があることは上で述べたが、他にも様々な悲しみの感情を発生させる要因がある。解雇されるのではないかという先行きに対する不安、福利厚生が充実していないこと、その他様々な要素から悲しみの感情は大きくなる。一方で、正社員の多くが、たとえそれが、企業が労働者を自発的に働かせることを目的として作り出されたものだとしても、非正社員が手に入れることが難しい要素が生み出す、喜びの感情がある。こうしたことを考慮すれば、二つの立場における労働者の内在的な感情には、大きな隔りがあるのではないかと思う。

3、非正社員と正社員の労働生活

ここまで非正社員を取り巻く悪い側面をみてきたが、良い側面も考えられる。以下では、正社員では得られないメリットを提示していく。

企業は、従業員の欲望を操作して最大限働かせるために、やりがいや自己実現を提供する。一方で労働者は、やりがいや自己実現といった楽しい感情を生み出す要因となるものを求めるようになっている。しかし、そのようなものを求めることは、現状では厳しいという側面がある。グローバル化や経済成長の低下により企業の繁栄と衰退が絶え間なく起こっていることから、労働市場は極めて不安定といえる。さらに、非常に高い経済成長に支えられた終身雇用制度と年功序列制度が崩壊し、企業は共同体としての役割を果たさなくなっている。このような状況を踏まえれば、ある企業で、やりがいや自己実現を求めることはリスクが高い行為であり、労働者には不安が積みまとうことになる。不安の増大はさらなる競争へとつながり、隷属はますます強化されてしまう。

非正社員ならば、勤務時間は欲望を固定させられることが避けられないとしても、欲望の広がりを実体的にコントロールできる。働く時間を自分の都合で決定できる場合が多いからである。働く以外の時間を自分の趣味の時間に充てることも可能であり、企業で働くこと

を生活の中心に据える必要がない。企業内での自己実現を求めるのではなく、違う場所での自己実現を求めることができる。企業を自己実現の場として捉えずに、何か必要な資金を手に入れるために利用するという姿勢であれば、過剰な隷属に陥ることがない。もし過剰な労働が強制されたときは辞めることを選択する。正社員として、その企業で賃金以上のもの、やりがいを感じていたら辞めることを渋ることもあり得る。非正社員として企業を利用する姿勢があれば、企業の利益拡大という欲望に自らの欲望が固定された状態で、企業に帰属意識を持ちながら楽しい労働に際限なくのめりこむ可能性は低いのではないかと思う。

ロルドンは企業で働くことによって個人の多様な欲望が、企業が持つ利益拡大という欲望に固定化されてしまうこと、この現象こそが疎外であるとした。そして、疎外を人間本来が持つ欲望の広がりをも縮小させてしまうこととして否定的に捉えている。非正社員として企業に隷属する姿勢を回避できれば、疎外の程度を下げるのが可能であろう。

4、低消費生活

非正社員として働いていくとき、実際にどのような消費生活を営むのか。物質的な豊かさを求め、高い給料を稼ぐことはパートやアルバイトでは無理がある。賃金が低いという現状では、生活費を抑える必要が出てくる。物質的豊かさよりも精神的豊かさを重視する姿勢が求められる。あらゆる消費活動を制限しなければならないだろう。具体的には、外食を控える、車を持たない、娯楽にはインターネットを用いた SNS や無料情報コンテンツを利用するといったことが考えられる。

実際、企業に就職せず、事業を営んでいても、さらなる利益拡大をせずに、必要最低限のお金だけしか稼がないといったスローライフを実践する人々も出てきている。生活していくのに最低限必要な額だけ算出し、それ以上の金額を稼がないようにする。余った時間を自分が本当にやりたいと思うことに使う。このような人々のライフスタイルを参考にしてもよいだろう。

5、雇用制度

今のところ、非正社員の悲しみの感情が大きくなることに対する特別な対応は見られないが、今後、非正社員の増加が見込まれていることを考慮すれば、早急な対策が必要であろう。国としてもデメリットはある。非正社員の人はいつ切られるかわからないので安定性がなく、病気になれば給料は出なくなる。また、保険にも加入できず、賃金も低いという状態は結婚のしにくさにつながっている。結果として、非正規雇用の増加は出生率の低下につながり、人口減少のスピードは加速してしまう。

非正社員の賃金を上げることは必要だと考えている。日本では、非正社員の賃金は低く設定するという慣習があるので、すぐには了解を得られないかもしれない。海外では、短期間での雇用は企業側にもメリットがあることから、非正社員は正社員よりも高い賃金を払うことになっている国もある。本当に必要な期間、必要な分だけ働いてくれる非正社員の労働

は正社員による同じ労働よりも価値があると考えられている。正社員よりも多少高い賃金を非正社員に支払うことを義務づける制度を導入することを検討する必要があると思う。

6、これからの人々の生活

多様な生き方が尊重される時代といわれる中、非正社員に対する社会的評価は低いものになっていると感じている。例えば、ある学生がどこかの企業に正社員として就職が決まった時、その両親や親戚は安心したような態度をとるのが一般的だろう。だが、非正社員として就職が決まった時、就職の報告を喜ぶ人は、ほとんどいない。非正社員にはネガティブなイメージが付加されている。そして周りの人の多くが正社員を望み、非正社員として生きていくことが一般艇的ではなく、正社員としての生き方のモデルがありふれている。正社員として生きるほうが安心できる。多くの方は正社員として生きる道を求めている。だが、正社員になりたくとも、なれない人はいる。

どんな生き方が一番幸せか、人間の人間らしい生き方とは何か、それに対して様々な主張があり、どんな生き方をするのも個人の判断に任せられている。それでも、非正社員の場合は、物質的豊かさや仕事での自己実現を求めることは難しい。非正社員はありふれたものとなった。国は非正社員が暮らしやすい環境づくりが求められ、個人には非正社員でも十分満足に暮らしていけるような姿勢が求められている。非正社員の増加は、これまでの人々の生活のありかたが見直されるいい機会になっているのではないだろうか。

参考文献

フレデリック・ロルドン(2012)、杉村昌昭訳 「なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷“になるのか？」作品社